かわひらこ

心音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かわひらこ

【Ｎコード】
Ｎ４１９７Ｐ

【作者名】
心音

【あらすじ】
夢に出てくる虹色の蝶。
そんな蝶を追い求めて男性は探し続ける。
あるとき古本屋を訪ねたとき、図鑑を見つける。そこには今まで探した、夢に見た蝶がいた。

（前書き）

かわひらことは蝶の事です。
昆虫を題材にした小説を書きました。

かわひらことは、蝶の古名である。
蝶の翅は細い体に比べて著しく大きく、カラフルな色彩で人目に付きやすいため、身近な昆虫として古くから親しまれている。蝶を研究する研究家も多く世界には多くの種類の蝶が生息しており、人々の目を楽しませている。
現代では環境の変化や過剰な採取によって絶滅した蝶も少なくない。その反面、新たな新種が発見される事もある。
これから描く話は、蝶に魅せられた男性の話。
この男性は幼いころから毎晩のように蝶の夢を見ていた。緑の野原が広がる平地に様々な種類の花が咲いている。本屋で見かける図鑑には載っていない昆虫たちが花に群がりきらびやかに舞っている。その中でも一際奇麗な蝶がいる虹色の蝶。夢に出てくる蝶はそれはそれはきれいな虹色の蝶であり、男性の頭の上をひらひらと舞い捕まえようとしても逃げられてしまう。男性はどんな蝶なのか本物が見たいと思い図鑑や資料を調べあさったが、そんな蝶はどこにも書かれていなかった。自分の空想の中の蝶なのかと考え始めていた時、ある古本屋を見つけた。
「こんなところに本屋が…今まで見たことない。」
男性にとって幼少時代から育ってきて見慣れた町であったが、人道外れたところにその本屋はあった。外観はいかにも廃墟のように古かったが、入口には「営業中」の看板が立てられている。
「夢売屋…？」
そう書かれた店の看板の文字に男性はひかれるものがあった。気がついたときには自然に店のドアを開けていた。
今にも壊れそうなドアを開き中に入ると、独特のカビ臭いにおいが鼻を刺激する。部屋の中は薄暗く、きたない。床から天井まで伸びた本棚が部屋いっぱいに並ぶ。本棚の中には日本の本だけでなく

世界中の本が並べられていたがどれもこれも見たことのない古い本ばっかりである。本棚の奥には、会計と書かれた看板と台があり、黒い服を着た老女が椅子に座っていた。老女は頭まですっぽりと服をかぶり、口元だけしか見えない。その口元はうっすらと笑みを浮かべている。怖い、そんな考えが頭をよぎったが男性は老女の元へと自然に足が進んだ。老女の前に立つとこう言った。

「あの…僕は本を探しています…。昆虫図鑑などはありますでしょうか？」

すると老女は

「お探しの本ですね…。ずっと待っていましたよ、本はあちらです。」

老女はそう言って奥の棚を指差した。

老女が指さした場所は小さな天窓から光が射していた。光に照らされる本が一冊がある。男性はその本に引き寄せられるようにして、ゆっくり本に近づいて行った。その本は埃をかぶっており、男性は本を手に取り表紙の埃を払いのける。

「この本は…『奇虫図鑑』と書かれているけど…何だろ。」

始めてみる本に興味深々の男性は表紙を開いた。そこには著者の写真があった。白いひげに丸い眼鏡。まるで学者のような…。写真の横には手書きのメッセージが書かれていた。

「はじめに。この本に載っている数々の昆虫は希少価値の高い昆虫であり未だ発見されていないものばかりである。なぜ発見されないのか…昆虫には、擬態という隠れる能力を持っているものがいる。擬態は、食物連鎖の世界で生き残るために、虫たちはさまざまな工夫をしている。その１つがカムフラージュであり、擬態。これには背景、植物の葉・樹木の幹などに溶け込んで身を隠す方法、食欲をそそらない物にわが身を似せる方法、自分より強い昆虫になりすます方法、隠れ家を作ってその中に身をひそめる方法などがあるが、この本に載っている昆虫たちは擬態の能力は無い。むしろ無い方が昆虫たちにとって好都合であると私は考える。なぜなら……である。

本の…を見つけた時には……逃……がいい。もし、逃げないときには……がいい。」
「最後の文がかすれて読めない…何を書きたかったんだろう…。」
男性はさらにページを開く。そこには色鮮やかな蝶や蛾、いびつな形をしている甲虫が載っている。
「何だこれ…今まで見たことない昆虫ばかりだ…。」
次々にページをめくるが、すべて見たことのない昆虫ばかりであった。ページをめくっている時、男性の手が止まった。
「あっ…この蝶は…。」
男性が開いたページには幼い頃から夢に見たあの蝶が載っていた。大きく四枚の虹色の羽を持つ蝶、大きく黒い目は吸い込まれそうな深い黒。
男性はあることに気づく。
「この昆虫たち…名前が無い。」
どのページを開いても、昆虫が載っているだけで名前や大きさ生息地などの説明などが無い。男性は老女の方を見て聞いた。
「あのっ！この図鑑に載っている昆虫には名前や生態について書かれていないのですが、どうしてかわかりますか…。」
男性の質問に老女の口元はさらに笑みになる。老女はかすれた低い声でこう言った。
「その図鑑の昆虫たちは…まだ誰にも見つかっていない種類のものです…。しかし…いないわけではないのです。見つかっていないだけです。もし、貴方が見つけた時には…新種を発見したことになりますね。」
「新種…。」
男性は図鑑を見つめ、思い立ったように老女に言った。
「この昆虫達を見てみたいです。おばあさん…貴女はこの昆虫たちの居場所を知っているのですか？もし…知っているのなら教えていただけないでしょうか。」
老女は部屋の隅を指差した。そこには一メートルぐらいの高さの

ドアがあった。
「私は昆虫についてはよく分かりません…。しかし、あのドアからたまに綺麗な色をした蝶が入ってきます。カギをかけているはずなのに…どうしてでしょうか。貴方が行きたいのなら私は止めませんよ。しかし…行くならそれなりの代価が必要となります。」
「お金ですか？」
「いいえ…。お金には変えられないものです。それは…貴方が無事に帰ってきたらにしましょう。」
男性は首をかしげるが、今は図鑑の蝶を見たい気持ちの方が強くドアの向こう側に行く事しか考えていなかった。
「おばあさん。私が帰ってきたら必ず代価をお支払いします。だから…だからドアの奥に入ってもよろしいでしょうか？」
老女はゆっくりと頷き、ドアの前に立つとカギを開け後ろに下がった。
「私はこれ以上先には行けません…貴方自身でドアを開けてお行きなさい。」
男性はドアの前に立ち、ドアノブを持ち深呼吸をひとつ。ゆっくりとドアを引いた瞬間、まぶしい光が男性を包みドアの奥に引き込んだ。
「うわっ…」
男性はあまりのまぶしさに目をつぶった。聞こえたのはドアの閉まる音…。

「んっ…。ここは…。」
男性が目を開ける。まだ慣れない視界の中に見たのは、夢と同じ風景。緑の野原が広がる平地に様々な種類の花が咲いている。男性は空を見上げる。真っ青な青空がどこまでも広がっている。
「こんなところ…今まで見たことない。それに…ここにいる昆虫は…。」
男性のいる場所にいる昆虫…図鑑に載っている昆虫たちだった。

色鮮やかな蝶、いびつな形の甲虫。
「すごいっ！すごいぞ！僕が夢に見た場所、今まで見たことのない昆虫たち！これを全部捕まえて持って帰れば有名になれる…金持ちにもなれるかもしれない…。」
興奮している男性の前に一羽の蝶が舞う。
「あっ…お前は…。」
男性のずっと夢に出てきた蝶、あの虹色の蝶だった。空中を虹色の羽を羽ばたかせながら優雅に舞う。そんな蝶に男性は見とれていたが、いつしか蝶を捕まえようと追いかけていた。そんな男性をあざ笑うかのようにして、蝶は野原を優雅に飛んでいく。男性はやっきになりながら蝶を追いかける。
「くそっ…待て！」

蝶を追いかけてどれぐらいになっただろうか…五分？十分？いや…もう三十分以上は追いかけてるはずだ。それより…こんなにずっと野原が続いているなんて…どうしてだ。

男性はふらふらになりながらも蝶を追いかけることをやめようとはしなかった。不思議なことに、男性が止まると蝶も止まる。再び追いかけられれば男性のペースに合わせながら蝶が逃げる。そうして蝶は男性をどこかへおびき寄せているような…。
「うわっっ…！」
蝶を追いかけるのに夢中になっていた男性は、蝶ばかりを見て走っていたため穴があるのに気付かず落ちてしまった。
「いっ…たい…。」
頭をさすりながら上を見上げると青い空が広がっていた。穴の深さは男性の背丈ぐらいあり、ドームのような形をしていた。周りには根っこすらない。男性は走り疲れたのか穴の底で大の字になって空を見つめていた。
「はぁ…。どうやって出ようか。」

ぼっと空を眺めていると男性は虹を見つける。
「虹だ…雨なんて降っていないのに…それにしても綺麗な虹だ。今まで見たことない美しさだ…。まるであの蝶のような…。」
男性は言葉を詰まらせた。男性の見つけた虹はだんだんと大きさを増している。そして、男性のいる穴へと近づいていくる。よく見ると虹ではない。虹色の蝶が群れを成して男性の元へと向かってくる。
「すごいっ…！あんなにたくさん…」
蝶たちは穴の上をくるくると舞っている。
「なんて綺麗なんだ…。」
男性が蝶に見とれていると、蝶たちは羽から粉を出し始めた。それは虹色の鱗粉だった。鱗粉は男性に降り注いでいく。
「すごい…素敵だ…」
しばらくして男性に変化が出る。
「ん…体の力が抜けていく…目もかすんできて…。」
男性は重くなった瞼を閉じずにはいられなくなり、深い眠りについた。

それから何時間たっただろうか、男性は奇妙な音に気付き目を醒ます。
バリバリ…バリバリ…ムシャムシャ…
「なんだ…」
バリバリ…バリバリ…ムシャムシャ…
男性は目を開けると見えたのはさっきと同じ青い空。さっきと違うのは音。バリバリ、ムシャムシャという奇妙な音。音がするのは男性の足元の方…男性は恐る恐る音の方を見た。
「うわぁぁぁぁぁぁぁ！」
男性の足元には数えきれないほど大量の幼虫が何かを食べている。
バリバリ…ムシャムシャ…
よく見ると…男性の足があるはずの場所に足が無い。何かで赤く

染まった服の下ではもぞもぞと幼虫が動いている。
「あ…し…？俺のあし？嘘だ…嘘だ！」
混乱する男性の嗅覚にあるにおい。鉄のようなにおい…すぐに血の匂いだと気付いた。そして確信する。幼虫が食べているのは自分の足だと。
「やめろ！やめろっ！くそっ・・・」
手で幼虫を払いのけよう動かしても男性の手は動かない。男性は手を見た。男性の手が、腕があった場所にもはや身体は無い。すでに幼虫に食べられてしまったようだ。幼虫はどんどん男性の身体を食べていく。
男性があたりを見回すと、穴の壁には金色のさなぎがたくさんくっついている。一匹ではない。壁一面にさなぎがくっついている。その時、さなぎの一つがバリッと音を立てて孵化した。さなぎの中からはあの虹色の蝶が出てきた。さらに次々とさなぎが羽化し羽を広げ空へと羽ばたいていく。
男性は気付いた。自分の身体を食べている幼虫は、幼いころから夢見て追いかけていた蝶の幼虫であると。
バリバリ…ムシャムシャ…
幼虫はどんどん男性の身体を食べていく。しかし不思議と痛みは無い。
バリバリ…ムシャムシャ…
いつの間にか首の下まで食べられ始めていた。男性はふと、図鑑に書いてあった著者のメッセージを思い出した。
「はじめに。この本に載っている数々の昆虫は希少価値の高い昆虫であり未だ発見されていないものばかりである。なぜ発見されないのか…昆虫には、擬態という隠れる能力を持っているものがいる。擬態は、食物連鎖の世界で生き残るために、虫たちはさまざまな工夫をしている。その１つがカムフラージュであり、擬態。これには背景、植物の葉・樹木の幹などに溶け込んで身を隠す方法、食欲を

そそらない物にわが身を似せる方法、自分より強い昆虫になりすます方法、隠れ家を作ってその中に身をひそめる方法などがあるが、この本に載っている昆虫たちは擬態の能力は無い。むしろ無い方が昆虫たちにとって好都合であると私は考える。なぜなら……である。本の…を見つけた時には……逃……がいい。もし、逃げないときには……がいい。」

なんで図鑑に載っている昆虫たちに擬態の能力が無いのか。なんで好都合なのか。そして著者が何を伝えたかたのか。

図鑑に載っている昆虫たちは皆肉食の昆虫であるということ。著者は逃げることを伝えたかったということ。

そんなことを考えているうちにも男性の身体は食べられ続ける。

ゴクン。

大きな音をたて飲みこまれた男性身体。赤い血が土を濡らす。そこに男性の身体はもうない。身体を食べ終わった幼虫達は、壁に向かい一斉に口から糸を吐きさなぎになった。そして、しばらくすると、羽化して空へと飛びだって行った。

人道外れたところにその本屋はあった。外観はいかにも廃墟のように古かったが、入口には「営業中」の看板が立てられている。

店の奥には老女がいる。うっすら笑みを浮かべながらぼそりと…。

「代価はいただきました…。命はお金で買えませんもの…。また、餌を探さなきゃ…おなかがすいてしまうもの…。」

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
この作品は、私が中学の時に見た夢を小説にしてたものを再び書き直したものです。
蝶という魅力的な生物と、人間、恐怖、いろいろまざり合った小説です。
処女作品であり、何かと文章でおかしい表現があるかと思いますが、それも含め一つの作品と思っていただけたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4197p/

かわひらこ

2010年12月18日21時11分発行